

西大寺食堂院出土須恵器甕 と内面の痕跡

—第404次

はじめに 西大寺食堂院の発掘調査では大型井戸SE950を検出した¹⁾ (平城第404次調査)。SE950からは完形に復元可能な須恵器甕が出土しており (図239)、この甕の内面には特徴的なリング状の痕跡が残る。本報告では、この甕の内面に残る痕跡について検討した成果を報告する。

SE950出土須恵器甕 SE950出土須恵器甕 (甕A) は、底部片が礫層、胴部から肩部・口縁部がe～b層にわたって出土した。これらの破片を接合したところ、ほぼ完形に復すことができた。出土状況と破片の大きさから、完形の状態で井戸に投棄され、埋没過程または埋没後に土圧で割れて破片化したものと想定される。

接合により復元した甕は、口径32.8cm、頸部径30.4cm、胴部最大径64.4cm、器高64.4cmである。外面に擬格子状を呈する平行叩き調整の後カキメをほどこし、内面は当て具痕跡が明瞭に残る。口縁端部は断面が三角形を呈し上面が尖る形状を呈する。底部外面では地中に据えていたような風化の境や擦れた痕跡等は確認できなかった。

内面の2種類の痕跡 この甕の内面をみると、水平を指向する直線的な痕跡がリング状に確認できる²⁾。肩部内面では白抜き状態の痕跡 (図240、痕跡A) が、水平方向に近い幅約1cmの細い痕跡 (a-a') と、水平よりは傾く幅約2cmの痕跡 (b-b') として観察できる。また、胴部下位から底部の屈曲点やや上位付近では薄茶色を呈する幅約1cmの痕跡が2条確認できる (図241のc・d、痕跡B)。これらの痕跡はいずれも水平を指向しており、全周を確認できていないが、本来は全周に付着していたものが消失したとみられる。

肉眼観察では、痕跡A・Bともに膜状・層状の付着物としては認識できず、帯状の色味の違いとして把握できる。また両痕跡を部分的に触れてみたが、どちらも指に付着することはない。

使用痕跡の可能性 痕跡A・Bは、各層から出土し接合した状態で破片間をまたいで確認できることから、埋没時や接合時の汚れや付着ではなく、廃棄以前に形成された痕跡と考えられる。また、これらの痕跡は製作・焼成に関わる同心円状の当て具痕跡や降灰とは無関係に確



図239 西大寺食堂院SE950出土須恵器甕

認できることから、製作・焼成段階の後に形成されたものと判断できる。よって、これらの痕跡は甕の使用段階に形成された痕跡の可能性が高く、各痕跡が水平を指向し内面のみで観察できることをふまえると、特に液体の内容物の喫水線を反映している可能性が考えられる。

痕跡の3次元計測と容量 以上の所見をふまえ、当研究所遺跡・調査技術研究室の協力のもと、甕および痕跡の記録を目的として甕の内外面の3次元計測をSfM/MVS³⁾を用いておこない、Gigameshで内面を図示した (図242)。

次に、Metashape上に各痕跡を反映させ、資料観察の結果にもとづき、a～dの各測点を複数指定した後、Cloudcompareで傾きを調整し、Autodesk fusion360を用いて容量を求めた。

その結果、口縁端部まで液体を満たした際の容量は約115リットル、頸部までの容量は約111リットルである。また、上記した痕跡の高さまで液体が満ちていたと仮定して容量を計算すると、a-a'までの容量は約77リットル、b-b'までは約93リットル、c-c'は約17リットル、d-d'は約8リットルである。また、痕跡の傾きに注目すると、口縁部を水平として約1度 (c-c'、d-d') と約5度 (a-a')、約10度 (b-b') の3種に分かれることが確認できた。

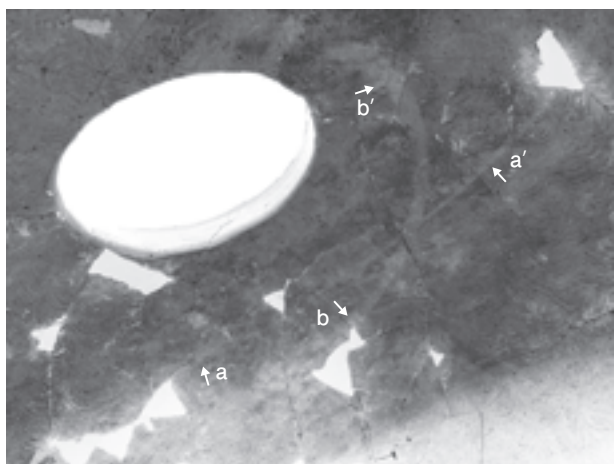


図240 甕内面の痕跡A

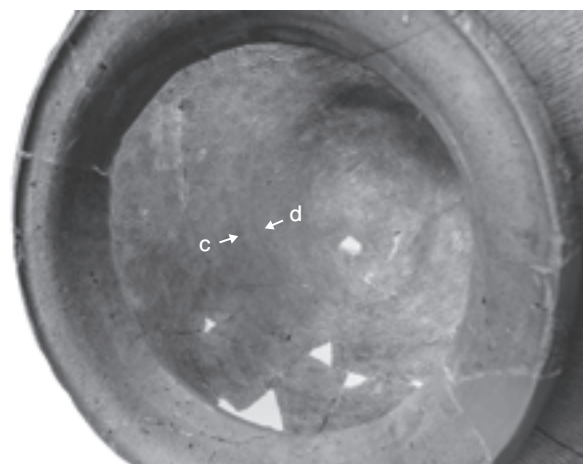


図241 甕内面の痕跡B

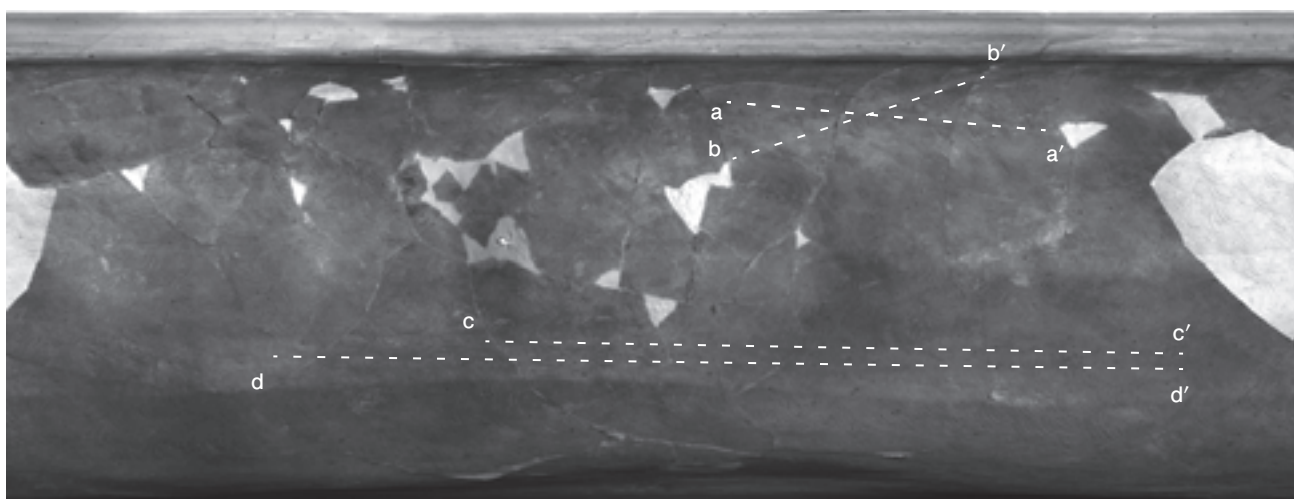


図242 SE950出土須恵器甕内面（白破線は痕跡の下端を示す）

まとめと課題 西大寺食堂院SE950出土甕の内面には水平を指向する直線的な痕跡がリング状に残る。これは、使用時の痕跡である可能性がある。この場合、水平を指向する痕跡が複数存在し、痕跡の角度も複数あることから、内容物の喫水線が変化しており、少なくとも一度は甕を据え替えていたことを読み取ることができる。

SE950出土木簡をみると「醬漬瓜六斗」等の漬物に関する木簡が出土しており、同じくSE950から出土した製塩土器や瓜・茄子等の主日類から、西大寺食堂院において漬物を製造していた可能性がある。また、隣接して東西4列、南北5列の甕据付穴列(SX930)を検出しており、周辺の調査も含めて80基以上の甕が並んでいたと考えられている⁴⁾。本資料は西大寺食堂院で使用された甕および調理や貯蔵の実態を解明するために重要な情報をとど

めている。

ただし、現時点では痕跡A・Bが真に使用痕跡かどうか、なぜ複数の痕跡が生じるのかについてあきらかにできていない。本事例の報告を端緒として類似する事例を蓄積し、より良好な資料において科学的な分析による検証が望まれる⁵⁾。

（小田裕樹・三舟隆之／東京医療保健大学・山口欧志・金田明大）

註

- 1) 奈文研『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』2007。
- 2) 奈文研『官衙・集落と大甕』2019。
- 3) SfM/MVSの実行プログラムはMetashapeを利用した。
- 4) 前掲註1文献。
- 5) なお、この甕内面の当て具痕跡の凹凸にわずかに「白色付着物」（本書74頁）を観察でき、その一部は痕跡Aと重複している。